

平成の浪漫地図夢（ロマンチズム）

（X）私の伊能図フロア展

小網 均
（株式会社 ウエノ 特機部）



皆様、明けましておめでとうございます。2011年がやって来て、1年また1歳と重ねられる運命の鼓動、

そして連続（今年の元旦でこの世に生を授かってから22,352日目）となっています。今まで懸命に生きて来られた・今を懸命に生かされている、只ひたすらに感謝の念が湧いてくる年始めです、有りがたきかな!! 特に昨年を振り返ると時々刻々と移りゆく「時の流れ」に、自分を見付けることのできた1年でした。

昨年、秋晴れの10月23・24日、金沢工業大学の工大祭で「完全復元伊能図全国巡回フロア展」が開かれました。広々とした体育館に引き詰められた伊能図を、中二階から眺めていますと「日本って大きいナー!」。これまでは、机の上に広げた地図帳や壁掛け地図ぐらいを目にするのが常でした。柔道会場を思わせる、引き詰められた“畳?”に張ってある「デッカイ地図」から圧倒されて、歴史の重みが伝わってきました。

「伊能図の200年前と自分の生きた60年間に見る時代のうねり…?」

1.〈まず、地図を!やがて…激動の維新へと〉

◎時代のうねり、昔も今もロシアの干渉が…?

伊能忠敬の活躍していた1800年前後の我が国は、徳川三代将軍・家光以来の「諸外国にかき回されたくない!」で鎖国政策を続けていました。隣国ロシアはシベリアへ進出して、冬に氷付かない不凍港を求めておりました。領土を広げながら日本海沿岸を南下していた頃ですので、対岸にある日本に関心を持ちました。日本と貿易をしたい!鎖国をしている日本の北海道・本州の日本海沿岸へ出没するようになりました。幕府は「ロシア船が、どこに現れたの

か?」を知る必要がでてきました。各藩任せのバラバラな“分藩地図”を並べてみても位置関係が分からない?方位がキチント取れた全国统一地図で確認するべきである!日本海の各地の漁師たちと異国人との接触が増え、ペリー来航の1853年までの開国という時代のうねりが、ヒタヒタ、ヒタヒタ…と足音となって聞こえてくるようになりました。

◎こんな時に伊能さんが!

伊能忠敬は1794年50歳で、家業の酒造業を息子に任せて第二の人生に入りました。好きな天文学・暦学を発展させるため、幕府天文方の高橋至時に師事して天文測量を学びました。第11代将軍徳川家齊の時代で幕府は、1800年まです、北海道の地図作りを高橋至時に命じて忠敬が実施することになりました。

◎明治維新に果たした地図の役割は…

伊能忠敬は、幕命により1800年から1818年まで、苦労を重ねた末に力尽きて病没（享年74歳）まで全国の地図作り専念しました。残された部下達がやっと仕上げ、「1821年度大日本沿海輿地図作成」は幕府へ納品となりました。やがて、幕末にも活躍した大奥の篤姫は1835年薩摩に生まれ・翌年、土佐でも坂本龍馬が産声をあげて、明治維新のキャスト達が続々と準備されてくるのでした。幕臣の勝海舟も、伊能図を多くのキャスト達に見せたでしょう。地図に描かれた、それぞれの故郷「薩摩の桜島を・土佐の桂浜に」思いを馳せ、「凄い、自分はこんな所で生まれたのだ。今はここに居る…」で、地図の持つ広がりによって圧倒されて日本を知るのです。封建制度の中にある身分差別の弊害で、友人・知人が散っていく悲しみを憂い、怒りに換えて「自分は、この日本で今何を成すべきか?」を問い・開国という時代のうねりの中を成長して行ったのです。1867年に、鎖国政策の徳川幕府は大政奉還で終焉を迎えました。

伊能忠敬の地図作りから激動の時代が始まり、「自分の仕事に立ち向かう」エネルギーを地図から拾い、歴史が地図の上を走って行くのでした。

2.〈伊能図全国巡回フロア展、特に気づいたが、〉

①北海道の地名がカタカナ表記

アイヌ語の地名を表すのにカタカナを使って

いましたので、江戸の人々へ妙に親しみが湧いてきました。もしかして、私も測量士で伊能隊に参加していたら、サッポロ（札幌）を「寒歩路」として“寒い路を歩く”街と洒落た“寒ぶーい漢字”をつけたのに！（何せ、この表題のように「ロマンチズムを浪漫地図夢」とした私です）

②手抜きをした東北地方の太平洋側

三陸沿岸でリアス式の出入りの多い海岸線が、随分とのっぺりして（多分、手抜き？）描かれているのに驚きました。幕府の意向で精度・詳細調査をする必要があったのは、海外からの脅威を直接受ける日本海沿岸・九州西側だったのです。幕末のように太平洋から黒船が来るのは、予想もできなかったのです。なんと200年後の今でも、中国・韓国・ロシアから「挑発を受けて揺さぶられている姿」に、“国の際”の問題がいつの時代にも起るのです。

③200年前にも生まれ故郷“風無村”があった



ここは能登半島西側にある風無村で、私が生まれた所です。なんと、地名が今日のバス停の名前となって残っています。

驚きでした、200年前にも集落はあったのです。確かに地形と村落名は、私の故郷の地名なのです。郷愁が湧いてきました。

④ない・ない？神奈川県横浜市で暮した「平安町」が!!

昭和27年に能登から移り住んだ町がないのです。一生懸命に探しましたが、どうしてもないのです…なぜだろう？

(i) 小学校4年の社会科：「横浜市史の中で江戸時代後期、飢饉の対策で稲作が奨励され、新田開発が盛んに行われました。横浜市西区あたりに、1839年から平沼新田・岡野新田という埋立地が作られた」と習ったのを思い出しました。
(ii) 学生時代の地誌学：大正時代の、関東大震災で焼け焦げた家屋の廃材が、現在の横浜駅東側に捨てられて埋立地になりました。先の大戦で横浜空襲の後始末で廃材を…と捨場になり、埋立地がどんどんと増えました。

(iii) 恩師の卒論：戦後の復興政策のもとで産業振興の適地として、埋立地の利用が急務になり京



（三浦半島から、横浜・川崎・江戸を眺める）
浜工業地帯がこうしてできました。そこに隣接して出来上がった地方出身の工場労働者の町へ…父が「オラー、東京さ行くだ！」と母を連れ・兄が従い、3歳の私「俺も母ちゃんで行く！」で移ったのが「平安町」でした。

高度成長という時代のうねりに呑み込まれて、都市へ一極集中の初めの頃の姿でした。「受けてきた教育」から、伊能さんの地図に載っていない我が町の歴史を読み解きました。眺めて進めるうちに、“地図から読み解く歴史”が、面白くなってきました。金沢工業大学の体育館で200年前の能登半島・金沢・横浜間を行ったり来たりしていましたが、床の地図の下から老人らしき人の声がしてきました。「あの一、小網さん・小網さんでしょう…」。

（それは、伊能さんの“地図の魂？”でした!）



「1821年度 大日本沿海輿地図作成」の主任技師：伊能忠敬と申します。小網さんの噂は、測量協会北陸支部の「測標」と関西支部の「測量」をも読んで知っていました。{北陸支部「測標」89号（平成18年盛夏号）で「平成の浪漫地図夢」との見出しで-星と時刻を測る-に載っていました}。私に触発されて同じ56歳から、「一人で全国測量に挑戦している」。嬉しいです、頑張ってください、期待しています！

一フロア展の地図を見ながら技術的な苦勞を言いますとねー

200年後の平成時代の国土地理院の地図に比べて東西に太めなんですよ、小網さんにはその理由が分かりますよね？

(i) **時計の精度**：1800年代の大昔は、水晶発振器（クォーツ）なるものが無くてね！経度測定に必要な正確な時を刻む道具のない時代でした。

緯度を測るには、真北方向で基準になる星（動かない星）北極星を使いました。2000年代になると世界時を刻める時計（クロノメータ）やGPSの時刻同期が出来て楽になったようです。良い道具を揃えられて羨ましいなー。太めになった主な理由は、経度測定の基準になる時計の精度が悪かったからです。

(ii) **村の名前が位置情報**：地図には、海岸線の村の名前が列記されている。「ロシアの船がどの村で目撃されたか」を管轄する地区の代官から、江戸の幕府へ宛てた手紙（文字による位置情報）が発せられる。届いた手紙の内容を、江戸城の大広間で伊能図を広げながら確認する（2次元情報に変換して）、地理条件・状況を把握し、対策を検討して各藩へ指令をだす。「大日本沿海輿地図」では、地形表現の精度よりも村の位置関係・並びが大切なのです。パソコンがなくて画像情報を送れない時代でしたので、情報の変換作業に工夫が必要でした。

小網さん、良く読み解きをしてくださいました。今後も私の足跡を追って楽しんで地図を作ってください」

3. 〈平成の伊能忠敬目指して〉

航空測量会社に身を置き、測量技術の進歩を見てきました。観測・計算・展開の自動化となつて省力化が進みました。センサ技術・ソフトの進化で、「コスト削減・効率化」が叫ばれ、技術者から見ると読む・書く・計算するまで奪い取りました。デジタル化という時代のうねりが、リストラで職場まで去らねばならない時代になりました。

自分の目で観測・手で観測値を書く・加算機で計算する「人が関わる」が懐かしくなりました。会社がだめなら、「自分が関われる地図作り」でルート一寸法師航跡図作成を始めました。「伊能忠敬が、数え56歳から日本地図を…」に触発されてのことでした。北陸の漁港で

天文測量をしてきました。太陽観測をしながら経緯度を求め、観測値を展開して地図にしていくな。すべて自分の目で・手で・足で・「関われる」ことが楽しいのです。

デジタル化という時代のうねりの中で見失って行くものは、「何を測り・どう計算して・何が描かれているか」を教育で学び、常に「デジタル表示が、本当に正しいのか」を問い・検証出来る“目”（技術力）ではないか？

体育館の床に展開されていた伊能図は、200年前の伊能さんたちの「観測機材の設計から、全て私どもの手で作りました・関わりました。」が表現されているのでした。「GPS受信機のボタンを押せば経緯度が分かる」でないのです。

◎第一次測量は、平成17年8月13日（黒部市生地漁港）から平成21年9月21日（京都御所蛤御門）まで、偶然にも電卓の日数計算ソフトでピタリ1500日目と表示され、天測点84点で終了しました。

◎第二次測量は、昨年10月10日より福井県三方郡にある潮香漂う日向漁港から出発しました。若狭・丹後・但馬、そして山陰に入り因幡・伯耆・出雲・石見・長門の下関港まで目指すことにしました。「継続は力なり」で、伊能さんとは異なる苦勞がありますけれど続けていくつもりです。

◎第三次測量以降は、九州・山陽・四国・大阪・紀州・東海と進み、102歳で江戸湾（東京湾）へ着き、三陸を経て北海道一周・出羽から新潟へ、そして125歳で富山に戻り、全国地図を完成させる「やれば出来る、何ごともし！」…

これ、平成23年の初夢：「平成の浪漫地図夢」でした！

